

# 放送人の会

No.60  
2013.3.22

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

代表幹事 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 須斎恵美子

## 日韓テレビ業界の動き二、三

### 次世代コンテンツフォーラム

昨年11月、プサン・コンテンツ・マーケット(略称BCM)組織委員会会長の招待で、釜山に行ってきた。BCMとは、毎年5月、韓国・釜山で開催される、アニメやドラマなどのテレビ番組の世界的な売買・取引市場のことである。参加国は50カ国以上だという。

11月の会議は、ことし5月のBCMの中で行われる次世代コンテンツ・フォーラムの準備会議であった。フォーラムの参加国は日本・韓国・中国である。これからの世界市場で、どのようなコンテンツが期待されるか、について3カ国で情報交換しよう、というのが予備会議の主旨であった。

BCMとしては、アニメ、ドラマ、脚本の分野に期待感を持っているようだった。中国側は、モバイル用のコンテンツに期待を示していた。

一昨年の札幌での日韓中テレビ制作者フォーラムで、次年からのBCMでドキュメンタリー番組も市場に乗せる予定と発表されていたが、予

代表幹事 今野 勉

備会議に出席して分かったことは、結局ドキュメンタリーは市場に呼ばれなかったということであった。ドキュメンタリー番組の流通を期待するのはまだ早いとの判断が働いたようだ。

### 釜山・未来の映像都市

予備会議のあと、釜山市内の「映画の殿堂」の見学が用意されていた。釜山国際映画祭の会場であることは承知していたが、その建物の前に立つたとき、あまりの巨大さに圧倒された。

1本の円柱を軸にして、大小2枚の翼を思わせる巨大な天井が空を覆っていた。1本の支柱だけで支えられて広がる天井の面積は世界一で、設計は北欧の建築家だという。大小の劇場や映画館が中に納められていて、将来的には、この殿堂のまわりに、撮影スタジオなど映像制作関連施設、映倫、アーカイブなど映画関連などが設けられるとのことであった。釜山は、国を挙げての施策によって、巨大な映像都市へ変貌しつつ

あるのだ。

一瞬、もう日本は追いつけない、と思ってしまった。釜山は、アメリカのハリウッド、イタリアのチネチッタのような位置を、アジアで占めはじめている、というのが正直な感想であった。

### 東京も頑張らにやあ

さて、その釜山でこの5月に行われる次世代コンテンツ・フォーラムの日本側の代表団が決まった。

ATP(全日本テレビ番組制作社連盟)理事長倉内均氏が、日本側の共同委員長で、ドラマ委員がATP加盟社から、アニメ委員が日本動画協会から、脚本委員が日本脚本家連盟から選任された。放送人の会の代表幹事である私と幹事の林健嗣氏は顧問として参加することになった。

一方、ATPでは、ドキュメンタリー番組の国際共同制作を目的として、ATPをはじめとする幅広い業界組織を結集して、NPO法人東京TVフォーラムの設立に動き出した。BCMでは敬遠されたドキュメンタリー番組に真正面から取り組もうとするその意気を是としよう。

放送人の会も協力を求められている。代表幹事として私も東京TVフォーラムの理事に名を連ねる

釜山に負けてはいられない。東京も頑張らにやあ。もうすぐ春です。

# 放送人

## グランプリ

### 下馬評座談会

A まず2012年度はこんなことがあ

ったと、テレビ界の話題を並べてみよう。長寿番組の記録がいくつかある。TBSの「サンデーモーニング」が25周年。日曜の朝のワイドでサラリーマンがよくみている。関口宏の司会、スポーツはかつては大澤親分と今もやっている張本勲のコーナーが人気の番組だが、時事問題の扱いはわかりやすく、リベラル派のユニークな番組で、視聴率ベスト20の常連だ。

テレビ東京の「ガイアの夜明け」が10周年。これは経済ドキュメントと言えはいいが、日経の経済情報をバックに、現在の経済事象、さまざまなビジネスモデルを説明する。これはこれで面白い。

日テレの「ぶらり途中下車の旅」が1000回を突破。途中下車してそこを歩くという番組のハシリでいまや長寿番組。テレビ朝でかつて地井武男がやっていたま加山雄三がやっている「若大将のゆうゆう散歩」。地井武男がよかったが亡くなった。

テレビ60周年記念番組では、NHKがまずやって、次に日テレで、先発両局の提携で2夜連続でやった。NHKと民放の違いを示す意図で、両者の交流番組があまり

ないなかで珍しい試みだ。

B 「サンデーモーニング」はなぜ視聴率が高いのだろう。

C 大事な話をエンターテインメントの要素を入れながら関口の語り口で、というのがいいのだろう。関口宏はいま一番進歩的で左翼にもみえるかもしれない、というのは変じゃないだろうか。(笑い)

D 出演者はそれぞれ個性があり、寺島実郎は原発については賛成派。だが、ときに体制的な意見に激越な批判を吐く。

A 涌井雅之は園芸評論家という肩書ながらきちんと意見を言う。田中優子は実在田中優子だし、面白いね。そして金子勝

B 視聴率のピークはスポーツコーナーで「喝!」と「天晴れ!」が大澤親分のこと以来人気。

C 張本は一貫してアメリカ野球が嫌いだが、あれがいい。面白みには欠けるが妥協のなさがいい。

D 昨年末の選挙報道番組を展望すると、タレント起用の民放型が人気がなくなり、NHKがダントツの人気、それに次ぐのがテレ東がやった池上彰の起用だ。

A 彼が各党の党首にインタビューするのだがアメリカCBSのキャスターばかりで、なかなかのものだった。

B 石原慎太郎と「いやな奴だ」「そう言う言いは嫌われる」とやりあった。

C 他の民放の賑やかして芸人を使うやり方はもうダメだろう。

D これほど社会が激しく動いていると、ドキュメンタリーでは追い付けない。「サンデーモーニング」などのワイドで分析するものもひとつだが、BSフジの「プライム三

ニュース」は毎日2時間やって、なかなかのものだ。「サンデーモーニング」もドキュメンタリーも「解釈」をするが、「プライム

ニュース」は当事者に素材を渡す。フジ・サンケイの保守体質はあるが、例えば、T

PPの話題の場合はガットなどの貿易交渉を

実際にやってきたメンバーを集めて、アメリカの手の内、戦略を具体的に解説する。先日森前首相がロシアに行ったが、その場合、前ロシア大使を招いて北方領土問題をととうとやらせる。北方領土4島は琉球列島に吐喝列島を合わせた面積より広い。択捉島だけで佐渡島、淡路島を合わせた面積より広い。そんなデータを含め

これまでの歴史的経緯を述べる。森・プーチン会談については肩を叩きあう写真を示す。1時間にわたって解釈ではなく徹底して素材を示す。八木亜希子キャスターと元カメラマンの反町理のからみがいい。カメラマンとして採用され官邸キャップになつた男だが、インタビューが適確だ。

A 田原総一郎流の強引に自分の土俵に引きずり込めざるやり方がもう完全に浮いている。「プライム」のキャスターは見てくれは悪いが話の中身がいい。解説委員が出てくるとダメだ。

B TBSラジオで長谷川Dが理論家の若手を集めて月に1回くらいそれと同じようなことを深夜やっている。NHKでは「日本のジレンマ」がある。集まった若手は気軽に提案する。田原総一郎流のデイベト番組とは全く違う。難しい言葉ではなく発想のユニークさではとさせざる。民俗学の赤坂憲雄は東北学をやっているが、政治用語、哲学用語を一切排除している。

「日本のジレンマ」がある。集まった若手は気軽に提案する。田原総一郎流のデイベト番組とは全く違う。難しい言葉ではなく発想のユニークさではとさせざる。民俗学の赤坂憲雄は東北学をやっているが、政治用語、哲学用語を一切排除している。

C 19世紀末から20世紀半ばまでの日本の植民地獲得戦争の時代の検証は不徹底だから、心の中に反権力のポーズをとらな

いとジャーナリストはやってられない。しかしそこをきちんとおさえて、生の素材で正面から問いかけた方がいい。解釈を押し付けるのではなく素材、その姿勢のある番組が始まったと思う。

D あと話題としてはロンドン五輪。これは開会式が素晴らしかった。

A 韓国の選手が竹島抗議をして批判され、謝罪したが、メダルの剥奪はなかった。レスリングの種目除外というオリンピックの運営はいろいろおかしい。

B レスリングは古代ギリシャ、ローマ以来の競技だが、ヨーロッパの貴族委員に嫌われて除外された。

C 貴族というよりスポーツマフィア。ヨーロッパには競技をいかにビジネスにするかの体制ががっちりできている。

A テレビ界の話題に移ると、次長・課長の河本準一のお母さんが生活保護を受けていて、稼いでいる芸能人がこれは何だとバッシングされ、BPOで審議対象になつた。これは河本個人の問題で番組とどう関わってBPOが審議したのかわからないが、これから生活保護の制度の論議がひろがった。

B BPOはワイドショーが個人攻撃をあおりたてている、あるいは性表現が過激になっていることに危機感をいだいているのだろうか。

C BPOは寄せられた問題を積極的に審議しているが、マンパワーが足りないの

ドラマ

単発ドラマ

- 4/30 「悪女について」 (TBS)
- 5/5 「無垢の島」 (NHK 大分)
- 6/16 土曜ドラマ「永遠の泉」(NHK)
- 7/1 夢の扉特別編「20年後の君へ」(TBS)
- 7/23 橋田壽賀子 SP  
「妻が夫をおくるとき」(TBS)
- 8/26 プレミアムドラマ「うたの家～歌人  
河野裕子とその家族」(NHKBS2)
- 9/15 「だましゑ歌麿Ⅱ」(テレ朝)
- 9/22 「みおつくし料理帖」(テレ朝)
- 9/8-10/6 土曜ドラマ「負けて勝つ～戦後  
を創った男吉田茂」(NHK)
- 10/7、14 「尾根のかなたに～父と息子の日  
航機墜落事故」(WOWOW)
- 10/15、27 「ダブルフェイス」(TBS WOWOW の  
2局連動ドラマの試み)
- 11/2 「最後から二番目の恋 2012 年秋」  
(フジ)
- 11/3 ドラマ WSP 「尋ね人」(WOWOW)
- 11/4 松本清張没後 20 年記念「疑惑」  
(フジ)
- 11/17 「鬼平外伝 正月四日の客」(日本映  
画衛星放送)
- 1/19 テレ朝開局 55 周年記念 黒沢明ドラ  
マ SP 「野良犬」
- 1/20 連続ドラマ W 「女と男の熱帯」  
(WOWOW)
- 1/26、2/2、9 3 回シリーズ「メイドインジ  
ャパン」(NHK)
- 1/27 「命のあしあと」(NHK プレミアム)
- 2/2 「最も遠い銀河」(テレ朝)
- 2/9 「上意討ち～拝領妻始末」(テレ朝)
- 2/17 「必殺仕事人 2013」(テレ朝)
- 1/8～12/23 大河ドラマ「平清盛」(NHK)

正月企画

- 1/1 「御鏡拝借」(NHK)
- 1/1 「相棒 元日 SP～アリス」(テレ朝)
- 1/2 新春 10 時間ワイド「白虎隊～敗れざ  
る者たち」(テレ東)

などへの局側の反応は相変わらずで、BPOは局との対話を考えている。

D テレビ60周年で三宅民夫司会の座談会をNHKでやっていたが、インターネットの参加が強く出た。若者のアクセスはニュースについてはテレビを抜いており、全体でも新聞を抜いている。

A 受像機自体が、これまでテレビジョンだけだったのが、画面の下にネットとかスマホとかずらずら並んで、そちらの方を見ちゃう、というか読んじゃう。聖徳太子じゃないけど…(笑)

B 画面の端っこにタレントの顔などCG風の扱いで出て、茶々を入れたりするが、窓を入れる必要はない。NHKの「ひるブラ」などは出演料の無駄遣いだ。

C NHKは「あまねく」伝えるのが使命だが、いまや「あまねく」は地域ではなくてあらゆるメディアに情報を出すのがNHKの「あまねく」なのだそう。

D 民放でもTBSが「大炎上生テレビ」を深夜放送したが、スタジオ生にネットか

らのものをどどん組み入れた。相当乱暴で混乱したが、面白かったし、こんなことをやる時代になったかと思った。

A インターラクティブなものではないと受け付けられないという世代がますます広がっている。自分が参加できる、発言できるものでないと興味がない。それも十分考えての参加、発言ではなくて、その場の条件反射的なものだ。

B 「あさイチ」も「プライム…」も「XXボタンを押して…」など絶えず参加を求めている。生番組ではもう決まりものだ。

C かつて「双方向」と言っていたが、今やテレビがそうならざるを得なくなっている。

D 料理番組のレシピは別のデータで取れるので、画面に分量が出なくなった。番組のホームページをみればいい。

A デジタル化というのは結局そんなことなのだ。

B 気分が社会学だ。何かあると新橋で酔っ払ったサラリーマンに聞く、とげぬき地

蔵でおばあちゃんに聞く、若者なら渋谷の街かどで聞く、とパターンが決まっている。それと同じで気分を疑似客観化するための双方向だ。

C 画面の下に入れるものを選ぶのにはかなりの人数を投じている。そこにどれだけの力を入れるかが勝負になっている。構成作家も入れて「あさイチ」では100人を越える。

D 「あさイチ」をみると、担当者がチョイスしたものを有働さんが読んでいくようだ。2000から3000来ると言っている。

A あれを選ぶ作業班のチーフが番組の本当のDかもしれない。スタジオで喋る人はわかっているからまかせます、という調子で…

B テレビ朝日が好調で、4月～6月が開局以来の3冠王。スポーツ中継も多かったが、「相棒」をはじめとするミステリー、そして「ニュースステーション」だ。

C というより、他局がこけた。TBSは

低迷が長いがこの半年のフジの凋落には驚く。どうしてこんなに落ちたのだろうか。

D ドラマは内容はいいものがあるのだが数字は惨憺たるものだ。視聴率ベスト20の中に入っているのはフジでは「サザエさん」ぐらいになった。

A TBSは落ちるのに10年かかったが、フジは1年だ。何のせいだろうか？

B ドラマの気分じゃないか。テレ朝の「相棒」は勸善懲惡の予定調和というか、現代版「水戸黄門」で、ABC発の沢口靖子の「科捜研」や名取裕子の「京都地検」も同じ路線で、視聴者はセットで見ている。

C みんな低くなって低いところにいる。テレ朝が上に行った。テレ東もそう。テレ東は最近しばしばTBSを抜いている。

D テレ東には「ガイアの夜明け」「カンパリア宮殿」「鑑定団」「未来世紀ジパング」など面白いものがけっこうある。

A テレ朝には昔風のオーソドックスという安心イメージがある。古館のニュースステーションは個人的には辟易するのだ

## 連続ドラマ

12年4月～

「ANSER」(テレ朝)「Wの悲劇」(テレ朝)  
「ATARU」(TBS)「ハパドル」(TBS)「もう一度君に、プロポーズ」(TBS)「37歳で医者になった僕」(フジ)「家族のうた」(フジ)「クレオパトラな女たち」(日テレ)「はつ恋」(NHK)  
「リーガルハイ」(フジ)「カエルの王様」(フジ)「カウンター2人」(Twe11V)

12年10月～

「ゴーイングマイホーム」(関西テレビ)  
「ドクターX-外科医・大門未知子」(テレ朝)  
「高校入試」(フジ)「TOKYOエアポート」(フジ)「PRINCESS」(フジ)「遅咲きのヒマワリ」(フジ)「大奥～誕生」(TBS)  
「とんび」(TBS)「夜行観覧車」(TBS)「おトメさん」(テレ朝)「信長のシェフ」(テレ朝)  
「ビブリア古書堂の事件手帖」(フジ)「サキ」(関西テレビ)「最高の離婚」(フジ)「泣くな、はらちゃん」(日テレ)「八重の桜」(NHK)「いつか陽のあたる場所で」(NHK)「まほろば番外地」(テレ東)  
「火怨・北の英雄アルタイル伝」(NHKBS)

が、あのくそまじめな感じが一般には安心感、信頼感につながっている。一時期大作ドラマを何本か作ったが、あれで安心してみられるイメージができた。かつてTBSが持っていたドラマの重量感をテレ朝がすっかりお株をとってしまった。

**B** フジの秋からのドラマは「ゴーイングマイホーム」「遅咲きのヒマワリ」「ビブリア古書堂の事件手帖」や現在のクール2の「最高の離婚」もこれまでのドラマの作り方をぶち壊している。これは慣れるまで時間がかかるが、実験としては面白い。

**C** ドラマの視聴率は再生を合計するとかなりの数字になるものがあるのだが。

**D** かつてドラマ好き、見巧者と言われたF1、F2などはなくなった。コアファンはDVDでなければ予約録画でみる。ニュートレンドのドラマであってもニュートレンドイードラマの復活なんて起こらない。

**A** ドラマを録画でみるひとがふえて、50%を超えた、と報道された。録画再生

についての視聴率のようなデータは、ビデオサーチが1週間以内のみた、という形で調べている。それをセールスデータには使い難い。アメリカではニールセンが3週間までにみたというのも含めてデータがあり、生でみたのとの合計のデータもあるが使うのには問題がある。

**B** 再生はしてもCMとはして見ているだろうとセールスには使えない。

**C** ラジオも最初はラジオを喜んだが、画面に対してサーバーに局はお金を払っているが画面での広告はサーバーの収入だ。ラジオはあそこからお金を稼げない。ポケットラジオで聞いているのがパソコンで聞いているだけのことだ。民放にとってメリットはない。だからラジオはデジタル化をやめてFMへ行こうとしている。既存のFM局は反対しているが。

**D** 新しくデジタルラジオを買う人は期待できずやはりFMへと動くだろうが一挙にはいかない。VHFハイという電波帯があるが、あれがコミュニティテレビに

使われ、それとFMラジオが平行して地方の電波の再編成が進むだろう。

## 【ドラマ】

**A** ドラマの話をしよう。たしかに名作は少ないが、単発ドラマでは「メイドインジャパン」に注目した。報道ドラマというか、NHKがここ2、3年続けている路線。

**B** 黒崎博の演出で、脚本の井上由美子がWOWOWの「バンドラ」以来蓄積してきた企業もので、取材もしっかりしている。

**C** 「ハゲタカ」によく似ているが、「ハゲタカ」では専門用語、テクニカルタームがやたらに出てきて一般視聴者がついてこられない、こんな大衆受けのレベルで作ろうという作り方のだろう。

**D** 「八重の桜」は子役が良かった。あれは八重の兄の西嶋秀俊がやっている山本覚馬の目が重要なのだ。

**A** 予告編が面白かった。鶴ヶ城とか八重が銃を撃つシーンとか。

**B** 「愛と純」はどうだろう。

**C** 「家政婦のミタ」の遊川和彦の脚本で従来の朝ドラの概念をぶっ壊すといつて始まった。意気は買うが…

**D** あれが視聴率は17とか18%とけっこう支持されている。朝のテレビ小説はこんなものとみてきた世代は一巡して、お話のすじが面白くて、てんやわんやだから見るという見方が始まったのだろう。

**A** 若い層は世の中そんなにうまく行くものではないと知っていて、あの番組のさまさまなトラブルを共感してみている。

**B** いや、4コマ漫画や、お笑いコントをつないだような運びで、人格も通っていない。

い。みんなとんでる。

**C** 朝ドラはBSでみて朝総合でも見て、昼のリピートでみて、土曜朝のプレミアムでまとめて1週間分みる。朝の時間だけが視聴者ではない。

**D** 「平清盛」は大河で初の視聴率一桁台。最低視聴率の記録を作ったが、実はなかなかよくできたドラマだと思ふ。兵庫県知事から画面が汚い、暗いとクレームをつけられても、プログレッシブカメラを使い続け、人物の関係がわかり難いと言われても、みなさんが勉強してくださいと、頑固さを貫き、妥協しない制作者(作家藤本有紀、制作磯智明、演出柴田岳志)たちの志を買った。悪人実は善人だったという描き方を排し、今様の「遊びをせんとやうまれけん」というテーマを貫き、清盛の、時代を夢中に、存分に生きた人生を、シエークスピア劇的な純情さと悪で彩り、たつぷり描き切った藤本の筆力に感心した。

**A** あの時代を描いたドラマは実は吉川英二の「新平家物語」に影響されているが、これは古典の「平家物語」「平治物語」「源平盛衰記」など古典をいかしている。古典を読むと撰関政治のいい加減さはわかるのだが、テレビではわからなかっただろう。

**B** 登場人物が多く関係が複雑でわからない。もう少し整理して欲しかった。

**C** 「平家物語」に詳しい人はあの番組の画面から「平家物語」の台詞が、たとえば知盛の「見るべきものは見つ」「波のしたにも都のそろうぞ」といった声が聴こえる気がしたという。

**D** 逆に「八重の桜」では幕末の公家と武士、公武合体の関係がよくわかる形に整理

されていた。

A 会津落城のあと、どれだけ描かれるのかに興味がある。

B 斗南藩に移封され苦勞した連中に、山川家のように東大総長の山川健次郎を出した家もある。その妹のちに大山巖に嫁す捨松で津田梅子の津田塾を援助した。

C 中村獅童が扮している佐川官兵衛はのちに西南の役で、谷干城の部下になって「仇討ちだ」といって薩摩と闘う。

D そして大正の終わりに容保の孫の松平節子さん(のちに勢津子と改名)が秩父宮と結婚し、会津藩は復権して納得した。

A 同志社創設の話につづくのだが、明治維新がらみでどこまで描けるかだ。やはり山川大蔵と斗南藩を描くべきだろう。

B 歴史ものではBSNHKの「アテルイ」が面白かった。お金も人もかけていないが、題材がいい。坂上田村麻呂と闘った敗者の物語りだ。

C アルテイは民を救うために降伏するが、最後に母とともに処刑され斬首される。

D 日本史の中にこんなに多様な種族があったのだとつと強調されている。

A 「アテルイ」と「八重の桜」は対になってる。東北学ドラマだ。

B 昭和一代が教わった日本史にはアテルイは出てこない。そして、えみし(蝦夷)とアイヌの関係もよくわかっていない。

C いや、アイヌ民族なら「シヤクシヤインの反乱」をNHKは作るべきだ。

D 「河野裕子とその家族」はドキュメンタリードラマ(演出熊坂出、出演風間杜夫、りりイ、倉科カナ)で、乳がんの高名な歌人と夫も子どもも歌人同士の家族の闘病

物語りが作歌で迎えられる。

A 「戦後を創った男吉田茂」は渡辺謙。制作中村高志、演出柳川強、脚本は「最高の離婚」の坂元裕二。現代史、あるいは現代史に近い人物をモデルにするときは一部の偏った勢力に利用されないよう、あるいは誤った歴史観を与えないよう、慎重に作るべきだと思う。

B 昨年の芸術祭は大賞がなくて、NHKの「とんび」、フジの「運味きのヒマワリ」、WOWOWの「尾根の彼方に父と息子の日航機墜落事故」が優秀賞だった。

C 「尾根の彼方に」は門田隆将原作、岡野真紀子Pで、岡田恵和の脚本がいい。事故の犠牲者の3家族、その残された人たちの悲しみからの再生の歴史を編年体でうまくまとめた。

D 若松節郎の演出もよかつたし、何より伊勢谷友介がいい。

A 「ヒリア古書堂の事件手帖」(P藤野良太、出演剛力彩芽、AKIRA)は本屋大賞を受賞し本が売れている。ドラマをみるとやはり原作がしっかりしているのだと思う。本という地味な題材で謎解きをやるのはかなりの手腕だ。このドラマは死体が出てこない。これが若者にこの後も受け容れられるのなら新しい路線が生まれたと言えるのだが。

B 一種の短編集で、話のコクがいまいちだが美術が凄い。セットもそうだが、骨董屋の協力を得て、アールデコとか疑りに凝っている。

C 宮沢賢治が自分の本に校正を書き込んでいたとか、太宰の晩年とか、ある種の文学臭があつて興味深い。文学臭をテレビ

ドラマに感じたことはこれまでなくて、その意味では面白かつた。

D 原作があつたとはいへ、賑やか、華やか、刺激の強いものが多いなかで思い切つて地味な面白い冒険だ。困っているフジだからできたドラマでテレビ朝ではできない。

A テレビ朝のドラマは映画っぽい。「上意討ち」は滝口康彦原作、橋本忍脚本だが、劇場用映画をテレビで見ている感じだつた。田村正和は「名優」を演じた。

B そう。映画のリメイクだろう、田村正和、仲間由紀江の役は映画では誰がやったのだろうと思つてみた。

C 三船敏郎と司葉子。橋本忍は小林正樹監督と三船の演技に不満で、改定稿を用意していた。

D むしろ、森鷗外の「阿部一族」にちかい雰囲気を感じたし、田村に父の「板妻」の「雄呂血」の面影を見た。

A 「運味きのヒマワリ」は若者路線だ。主演の生田斗真が四万十市の町おこし協力隊員。この町を舞台に真木よう子、桐谷健太などの若者がドラマをくりひろげる。

B 「最高の離婚」はだんだん面白くなる。結婚はスタートでなく過去。離婚がスタート。幸せ感の揺れ動き、その小さな感情を大事にし、失わないための必死の努力など、坂本裕二の脚本が小気味よい。

C 瑛太、尾野真千子、綾野剛、真木よう子と売り出しの4人が演じるフジお得意のラブコメディだ。主題歌の桑田佳祐が抜群。

D 関西テレビの「ゴイングマイウェイ」はCM制作者、フードスタイリストというテレビで虚像を創る世界に生きる主人公

と伝説の小さな生き物クーナがいるという信州の舞台設定が巧妙だ。阿部寛、久しぶりの山口智子、宮崎あおいがいい。子役の蒔田彩珠が監督是枝マジックにかかつていい。是枝は現代版小津安二郎。こんなテレビドラマがあつていい。もつとあつていい。

A そういえば文化庁の第63回芸術祭選奨は放送部門ではドラマ・プロデューサー八木康夫氏(芸員・現TBS)が受賞した。受賞対象のドラマは「悪女について」。

B 演出・鶴橋康夫。原作(有吉佐和子)は鈴木君子(実業家富小路公子)をめぐる27人の関係者の証言で成立しているが、ドラマは彼女の教養な生い立ちにセレブ

社会の虚飾を絡ませて戦後社会の歪みを描く(脚本・池端俊作)のだが、沢尻エリカという不敵なキャラの魅力をいかに引き出すかにある。

C スキャンダルとパッシングの渦中の沢尻を使いたいドラマPは多い。

D ビートたけしの演劇性を発見した八木のプロデューサー史は80、90年代の単発スペシャル、平成の沖繩ものと多岐にわたる。芸術選奨はむしろ遅すぎるくらいだ。

A 演出した鶴橋康夫は黒沢明へのオマージュとして「野良犬」をリメイクした。三船十志村の刑事コンビで描いた戦後世界とはちがいが、部活をめぐる少年たちの屈折感と狂気を直視するドラマに仕立てた。

B 役者はみんなうまいが、中でも柄本祐柄本明の倅だが、助演賞ものの内面演技は買える。

C 鶴橋、八木、佐藤(幹夫)の周辺に、愚直ともいえる執念で社会と肉親の関係

**ドキュメンタリー・教養番組**

- 4/7 「歌謡ドキュメント テレサ・テン」(BS朝日)
- 4/15 「失われた言葉をさがして 辺見庸〜ある死刑囚との対談」(NHK)
- 4/15 NNN ドキュメント「豪雪の里と咲栄ばあちゃん」(テレビ信州)
- 4/28 「イナサがまた吹く日〜仙台市荒浜 風寄せる集落の1年」(NHKBS)
- 4/29 N スペ「職場を襲う“新型うつ”」
- 4/29 「世界からみた福島原発事故」(NHKBS-2)
- 5/6 「ユリウスとロフマン 外国人弁護士の1350日」(テレビ信州)
- 5/17 SP「ゴリ meets 復帰つ子〜不惑をむかえた沖縄」(琉球放送)
- 5/13 ETV 特集「テレビが見つめた沖縄〜アーカイブ映像からたどる本土復帰40年」
- 5/18 BS スペ「多元証言ドキュメント 沖縄が日本に選った日1972.5.15」
- 5/20 ETV 特集「除染と避難のはざままで〜父親たちの250日」(NHKBS2)
- 5/21 「歩いています」(富山テレビ)
- 5/26 「原発の町に生れて〜誘致50年、福井の苦悩」(福井放送)
- 5/27 N スペ「未解決事件File2 オウム真理教VS警察 知られざる攻防」
- 5/30 「おしゃべり独居ばあさん」(CBC)
- 5/31 CBC スペシャル「千円の約束」
- 6/6 「お米のあした〜農業の未来を耕せ」(新潟総合TV)
- 6/10 ETV 特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図6川で何が起きているか」
- 6/10 NNN ドキュメント「心なき福祉〜札幌・姉妹孤立死を追う」(STV)
- 6/17 ETV 特集「“不滅”のプロジェクト〜核燃料サイクルの道程」(NHK2)
- 6/17 報道の魂「バッジとペンと〜日隅一雄の闘い」(TBS)
- 6/23 N スペ「産みたいのに産めない〜卵子老化の衝撃」
- 6/24 ETV 特集「飯館村1年〜人間と放射能の記録」(NHKBS2)
- 6/24 ザ・ノンフィクション「偏差値じゃない〜奇跡の高校将棋部」(フジ)
- 7/4 FEN 賞大賞候補「あそんでぼくらは人間になる〜子供にとって遊びとは」(テレビ広島)
- 7/15 報道の魂「漂流する絆〜震災のがれきの行方」(静岡放送)
- 7/21 N スペ「メルトダウン 連鎖の真相」(NHK)

性を架橋している池端がいる。池端は戦後ドラマツルギーのキーマンなのだ。

**D 「とんび」** TBS版は最終回視聴率を20・8%も取った。内野聖陽のドナリ節演技と泣かせ演出でさらった？

**A** スタッフが「JIN〜仁」組だからキモは心得ているのだ。

**B** 大阪の局が実験的に「こんにちはかあさん」を作った。東京では会員の片岡敬司さんが「8つの再生物語ラストデザイナー」を3月9日から放送する。ともにシチュエーションドラマというか、場を1箇所限定したドラマの原型といったものだ。東西期せずしてドラマの原点へ帰って、ドラマの再生を意欲的にやったというDの主張だ。

**C** 「こんにちはかあさん」は1回放送。小劇場の芝居そのままの感じだった。南果歩はうまいがテレビでは無理の感じだ。

**D** 「ラストデザイナー」はBSプレミアム

のオリジナルドラマ。「もし1回しか会えなかったらどの人とどんな話をしますか」という設定で舞台劇の会話を楽しむドラマだ。

**A** 中堅どころの脚本家の実力レースだが、この座談会では間に合わない。

**「ドキュメンタリー」**

**B** たくさんの番組があるが、なんといっても辺見庸の「失われた言葉をさがして」だろう。丸の内爆弾テロ事件の死刑囚、大道寺将司の俳句「咳(しわざ)くや慚愧に震ふまくらがり」など3・11で言葉を失った己に重ねて辺見は対話を重ねる。

**C** 「日本人は何を考えてきたか」は12本やって終わった。優れたシリーズだが、個人的に興味のあるテーマだと「あれ、なんでそこで終わるの？」としばしば思った。物足りなさはある。

**D** 回ごとに多少凸凹したが平均点は高い。

**A** 話題性があり、衝撃的だったのは「復興予算19兆円の行方」。テレビとしては珍しい調査報道の勝利だ。国会でDVDを見たとそうだ。

**B** 沖縄の道路整備から、外国留学生の費用までこれでやっちゃったのがみんな国民の知るところになった。

**C** Pは高山仁。日韓中フォーラムに出品した「孤独死」を作った。キャスターは鎌田靖。

**D** 「日本人は何を考えて…」では「北一輝と大川周明」「西田幾太郎と京都学派」「平塚雷鳥と市川房江」は「転向」に触れて面白かった。

**A** 「河上肇と福田徳三」。関東大震災をめぐり、福田徳三は一橋大学、当時の商科

大学で多くの学生を集めて大きな実態調査をした。マルクス経済の河上に比べてあまり知られていないがあの番組をみて偉さがわかった。

**B** 地味だったのだ。河上のように思想を語るほうが人気があった。逆に河上が情動的でひたすらに突き進んで行くというのも面白かった。

**C** 内橋克人氏のレポートが秀逸だった。

**D** 「国交正常化40年 日中関係はどこの向かうのか」は日中関係がこんなにこじれているなかで評価したい番組だ。そのほか「日中外交はこうして始まった」はJ貿易の高崎達之助の新しく発表された資料を紹介したし、「1972年、北京の5日間」

**A** 地方局の作品では原発を許した地域の住民と許さなかった地域の住民との対比を描いたものがあつた。

**B** 原発を呼び込んだ地区の番組が九州

- 7/29 シリーズ 日本人は何を考えてきたか(8)「人間復興の経済学を目指して～河上肇と福田徳三」(内橋克人、D 大森淳郎、P 塩田純)
- 8/6 N スペ「黒い雨～活かされなかった被爆者調査」(NHK)
- 8/11 「三つの名を生きた兵士たち～台湾先住民“高砂族”の20世紀」(NHKBS)
- 8/12 NNN ドキュメント「除染の島へ～故郷を追われて27年」(広島テレビ)
- 8/14 N スペ「戦場の軍法会議～処刑されなかった日本兵」(NHK)
- 8/15 「終戦 なぜ早く決められなかったのか」(NHK)
- 8/17 N スペ「最後の笑顔 納棺師のデッサン集」(NHK)
- 8/19 報道の魂「8・15終戦 記者たちの眼差し」(TBS)
- 8/25 「こうして僕は医師になる～沖縄県立中部病院研修日記」(NHK)
- 8/25 報道特集「18年昇任なく…自衛隊で密告者と呼ばれて」(TBS)
- 8/26 ETV 特集「オキナワとグアム～島が問うアジア・太平洋の未来」
- 9/9 N スペ シリーズ東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」(NHK)
- 9/22 BS1 スペ「1972年“北京の5日間” こうして中国は日本と握手した」
- 9/16, 23 ETV 特集 シリーズ チェルノブイリ原発事故現地報告(1)「ベラルーシの苦悩」(2)「ウクライナは訴える」
- 9/30 N スペ「日中外交はこうして始まった」
- 9/16 JNN 総力特集 震災報道SP「消えない放射能」(TBS)
- 10/14 ETV 特集「永山則夫100時間の告白～封印された精神鑑定の実実」
- 10/14 N スペ「中国文明の謎(1)中華のひょうりゅう幻の王朝を追う」
- 10/15 テレメンタリー2012「私は沖縄で枯葉剤を撒いた」(琉球朝日)
- 10/21 NNN ドキュメント「海を渡るコメ農家～アジアの胃袋を狙え」(テレビ新潟)
- 11/4 ザ・スクープSP「真相～DNA、一致せず!」(テレ朝)
- 11/11 N スペ「中国文明の謎(2)漢字誕生 王朝交代の秘密」
- 11/23 NNN ドキュメント「遠いフクシマの故郷～さまよえる家族たち」(福島中央テレビ、中京テレビ)
- 11/25 NNN ドキュメント「日本の空は今日も占領下?」(日テレ)
- 12/7 金曜プレステージ「さようなら勘九郎さん独占密着最期の日々」(フジ)
- 12/20 N スペ「中国文明の謎(3)始皇帝“中華”帝国への野望」
- 12/23 N スペ「日本国債」(NHK)

朝日放送の「誘惑の原発マネー」佐賀玄海町崩れたシナリオ。呼び込まなかった方はNHK名古屋の「模索」原発がでなかった町で。ともに力作で地方の時代映像祭でNHK名古屋は優秀賞を九州朝日放送は選奨を受賞している。

**C** 福井テレビには「原発の町に生れて、誘致50年、福井の苦悩」がある。自分の問題としてとらえてはいるが甘い、突っ込んでいない。状況説明だけに終わっている。Dは28歳、「ここまでできなかつた」と言っていた。

**D** 「復興のはざままで、神戸街づくりの教訓」は神戸長田区の失敗が気仙沼で繰り返されようとしている、というもの。女性Dが作った。

**A** 面白いのだが何か足りない。災害にたいして安全な街になったが商店街に人は

誰もいなくなった。住民を無視したプランが気仙沼でも進行して行く、というのだが、もう少し何かが足りない。

**B** Nスペ「運命の一枚」の沢木耕太郎が面白かった。ロバート・キャパの写真について、CGを使ったり執拗に検証する。沢木は「調査情報」に「江夏の21球」を書いているが、テレビでスローモーションがやるとみられる時代に、江夏がスクイズを見破ったシーンの細部を詳細に描き切った。あれを思い出す。ロバート・キャパというペンネームはアンドレ・フリーマンとゲルダ・タローの2人が作ったのだが、第3の男が現れてキャパの名で写真を撮り、ピュリッツァー賞をとり、その後現れない。キャパは架空の人物だったというドキュメンタリーだ。ドキュメンタリーでこれがやれるのかと驚嘆した。

**C** 横浜美術館がこのテーマで展覧会をやった。沢木は文春から本を出している。番組で沢木の新説のように扱っているのはおかしいとネットではきびしい批判がある。

**D** 「日曜美術館」でも取り上げたが、森達也のキャパ観が光っていた。

**A** キャパの話の面白さとCGがうまく出来たのに少し酔い過ぎた。

**B** 「新日本風土記」でやった富田勲と初音ミクを面白くみた。

**C** 初音ミクに興味がないひとには何もわからないだろう。彼女がパテントなどうるさいことを言わずオープンにしているという考えには興味があったが。

**D** 富田勲はテレビの初期にシンセサイザーの神様でかなりの高齢(80歳)。初音のまわりのスタッフはできないだろう

と反対したが、富田氏の熱意で実現した。

**A** Nスペの終戦特集「終戦 なぜ早く決められなかったのか」はやはり秀作だと思う。NHKが機密文書を発掘して番組を1本作る、またそれかとは言えるのだが面白かった。

**B** 無責任統治体制の典型で、戦後を混乱させ、まだその体質はなおっていない。それを指摘している重要な番組だ。

**C** 広島、中国放送の60周年記念番組「牡蠣が結ぶ世界の絆 オイスターロードを行く」が面白かった。牡蠣の養殖がグローバル化している状況を描いている。日本の養殖技術がオーストラリアで使われ、仙台の業者とフランスの業者がお互いの災害と援助を通じて結ばれていることなどたくさんさんの情報が盛り込まれていた。

**D** フジが2月21日の深夜2時からやっ

た南沙諸島の特集では、フジの報道局ではなくプロダクションが取材に行っている。1988年、中国はベトナムとの戦争に勝利し島の一部の領有を始めた。中国は三沙市を宣言するが、その首都は周囲2キロの小さな平たい町だ。そこに119人の漁民と30隻の漁船があり、観光の島だといっているが実は軍事の島だ。そこへ海南島からフェリーに乗って取材に行く。島に32時間滞在できるので、その間に島の実態をレポートしている。

尖閣列島については沖縄返還の際ニクソンがいろいろ言っているのだが、キッシンジャーとの会話が明瞭な音で録音されている。ニクソンは「繊維交渉で日本はズルいことをやっているから困らせてやれ」と言う。尖閣を含めた話だ。それに対してキッシンジャーが「それをやっちゃおしま

いよ」と言う。それに台湾が圧力をかけてくるとわかったこともあって、尖閣と言う言葉は使わず、北緯何度東経何度からの地域は日本の領有とするという表現になっている。取材チームがキッシンジャーを訪ねると彼は「日本と中国がいずれ問題を起す」と心配していた」と言う。

番組名は「領土の法則」潜入、中国が奪った禁断の島」。

A 録音は誰がとったの？

B アメリカのアーカイブの担当者が説明していたが、大統領の執務室で、マイクが何本か立っていて、盗み取りではなく、将来のための正式な記録だ。

沖縄返還の条約締結の2日か3日前の録音で、ニクソンの選挙地盤は繊維の工場が多いところで、ニクソンがアタマにきているのがよくわかる。

C B Sフジの「ブライムニュース」の北方領土の特集では元ロシアの大使は「20世紀はアメリカの世紀だが、後半はロシアとどうつきあうかの時代だった。21世紀は中国とどうつきあうかの世紀だ」と言った。その意味では中国の周辺で領土問題をかかえている圏は大変だ。中国に妥協するという精神は全くない。

D 中国は「南沙諸島の領有については2千数百年前の秦の時代からの証拠がある」と言い出す。2千年前を言われた周辺の国は抗弁できない。

A それにしても民放にこれはというドキュメンタリーがない。TBSには「報道の魂」しかない。

B かつて8・15でやっていたものは東北大地震以降少し力がなくなつた。

C ドキュメンタリーでは民放とNHK



鈴木典之さん



松尾羊一さん

2013年

- 1/12 N スペ「東日本大震災 空白の初期被爆～消えたヨウ素13!」
- 1/13 「世界初撮影! 深海の巨大イカ」(NHK)
- 1/13 シリーズ日本人は何を(10)「昭和維新の指導者たち～北一輝と大川周明」
- 1/20 シリーズ日本人は何を(11)「近代を超えて～西田幾太郎と京都学派」
- 1/20 N スペ「終の住処はどこに～老人漂流社会」
- 1/27 シリーズ日本人は何を(12)「平塚雷鳥と市川房江」
- 1/27 「活断層と原発、そして廃炉」(日テレ)
- 1/27 「筑紫哲也特集」(BSTBS)
- 2/3 N スペ「運命の一枚～沢木耕太郎ロバート・キャパ“戦場”写真最大の謎に挑む」
- 2/3 ETV 特集「音で描く宮沢賢治の宇宙～富田勲と初音ミク」
- 2/9 「牡蠣が結ぶ世界の絆 オイスターロードを行く」(中国放送)
- 2/10 N スペ「“核”のゴミはどこへ～検証・使用済み核燃料」
- 2/10 ETV 特集「“ノンポリのオタク”が日本を変えるとき 怒れる批評家宇野常寛」
- 2/17 ETV 特集「プレゼンが世界を変える」

エンタメ(バラエティー、趣味、教養など)

- 6/20 「爆笑問題の沖縄入門」(NHK)
- 7/18 SONG スペシャル「桑田啓祐の歌ってガッテン!」(NHK)
- 8/11 追悼・地井武男さん「ちい散歩 昭和の風景傑作選」(テレビ朝)
- 8/17 バリバラ「障害者の性(1)セックスの悩み 8/24 (2)セックスマイノリティー」
- 9/5 特番「花は咲く」スペシャル」ゲスト辻井伸之ほか(NHK)
- 9/10 プロフェッショナル仕事の流儀「高倉健インタビューSP」(NHK)
- 9/23 「ほこxたて3時間スペシャル」(フジ)
- 9/29 「矢沢永吉63歳のメッセージ～カリスマ40年目の夏」(NHK)
- 10/17 NONFIX「原発アイドル」(フジ)
- 11/4 ディープピープル「FMラジオDJ」小林克也ほか(NHK)
- 11/5 あさいチ「サイレントプア 声なき女性の貧困」(NHK)
- 12/12 「特大ガッチリマンデー! 業界新聞 No.1 ニュース大賞」(TBS)
- 12/4~7 とくダネ! シリーズ「総選挙スペシャル ニッポンの選択」(フジ)
- 12/16 日曜美術館「円空 飛騨巡礼の旅」(NHK)
- 12/22 キッチンが走る「しまなみ海道スペシャル」(NHK)
- 12/31 「NHK 紅白歌合戦」
- 1/1 「新春全日本なまりうたトーナメント」(テレ朝)

は勝負にならない。調査力、全国的な取材力でNHKに民放はとうてい勝てない。民放は違ったものを考えてはどうか。「ロバート・キャバ」のようなものなら狭い範囲の取材でできるはずだ。放送枠があればいいのだ。

**D** tvkの「希望の翼」はどうですか？

**A** 大山勝美氏は苦労したようだが、いい作品になった。

**B** 朝鮮から引き揚げてきた人はたくさんいるが、朝鮮の人と交流があるというケースは珍しい。しかも、朝鮮の羅逸星さんの方から探して声をかけてきた。

**C** 寒河江正さんのお父さんの功績が大きいようだ。医者で、博愛主義者、人道主義者で、朝鮮で民族の差別なく診療をした。呼吸器が専門で、引き揚げて仙台にいたところ川崎の公害せんそくがひどくなり、乞われて川崎に行ったんだ。

**D** おじいさんの時代は日本の神社を朝鮮に作って現地の人に拜ませた。そんな朝鮮の信仰を奪い、言語を奪い姓名を奪うといった状況がよくわかる。主人公は、みんないい家庭の少年で、彼らの世代がドラマを生んだのではなく状況のドラマだ。

**A** エピソードを積み重ねて、よくできている。良心的なドラマだ。韓国側はその良心的な部分だけをとりあげて影の部分を作らないので大山氏がかなり手を入れた。

**B** 韓国側には鄭さんなどにも協力を依頼して昔の映像を提供して貰った。

**C** 大山氏が放送人の会で日韓中フォーラムに関わってきたことも背景にある。

**D** 主題歌「鳳仙花」を佐藤しのぶと同志社大、延世大の合唱団が歌う。

## 「エンターテインメント」

**A** NHKがEテレで朝9時45分から15分の帯番組でやっている「カラフル！」が面白い。かつてヒューマンドキュメントを大人でなく子どもでも出来ないかと思つたが非常に難しかった。それをやっている。

教育界、学校で有名になつている番組だ。例えばNHK山形が作ったものは味噌

屋の子どもでおやじをみて「カッコイイ」という言葉はおかしい」と言う面白いキャラの小6生の生き生きとした姿や、津軽三味線で民謡を歌う子、つまり優等生、ナンバーワンではなく、オンリーワンの面白い子のドキュメントだ。日本だけでなく外国のチェコやポーランドなどの子どもたちのドキュメンタリーもある。

**B** 「ガッチリマンデー」が面白い。毎週、朝日曜の朝8時。何故日曜なのにマンデーなのか。実はもとは月曜にやっていたらしいが、日曜に学習してサラリーマンは月曜から働こうというタイトルだそう。ビジネスをエンターテインメントとしてとりあげていることに毎回感心する。視聴率もいい。

**C** 加藤浩次がいい。相方が岡村仁美。

**D** 「佐和子の朝」の阿川佐和子。彼女はいろんなところで話題になり表彰されているけどやはりいい。嫌な話をさらっとときいてしまう。インタビュワーとして実にうまい。

**A** 「BS歴史館」の渡辺真理が最近すごく冴えている。あの番組の司会には何人か出ていたが彼女が圧倒的にいい。彼女はラジオの「アクセス」に出ていたが、今はこれ1

本にしぼっている感じだ。

**B** 彼女の勉強は凄いいものでこれ1本でも大変だろう。

**C** 「歴史秘話ヒストリア」より面白い。

**D** 「さかのぼり日本史」が面白い。最近若い学者を使って「最近の資料では…」と面白い資料が出てくる。

**A** かつての「日本史探訪」「続日本史探訪」ではこの分野では誰、と学者は決まっていた。茨城大の磯田道史准教授は武士の家計簿を調べてきて紹介したが、あれ以来若い学者がいろいろ出ている。

**B** 「BS歴史館」は研究者が自分の言葉で喋っている。妙にかしこまらないのがいい。素人のゲスト起用が成功している。

**C** Eテレに「東北発未来塾」がある。(金曜夜11時〜放送 20分番組) 仙台局が中心で昨年3・11に事前特番、4月からレギュラー放送が始まった番組で、災害復興を支える人材を育てるため若者に教える。一人の講師が1か月を担当し、ソーシャルメディアをどう使うか、防災、商店街の再開、福島50秒CMの作り方など、いろんなテーマを、ときに東北大学を借りて講演したり、授業としてもなっていた。

**D** お笑いのサンドウィッチマンがやっているのをみた。2人は仙台商業高校の卒業生。

**A** サブタイトルは必ず「××のチカラ」。

**B** Eテレの「サイエンス」が面白い。サイエンス・ガールと呼ばれる数人の女の子が東大、北海道大などの秀才学生に対抗していろんな問題にチャレンジする。番組タイトルは「サイエンス」のアナグラムで、日常の疑問を科学的に解明する。ガール



堀川とんこうさん



前川英樹さん



河野尚行さん



隈部紀生さん

藤久ミネさん

ルズがジャンケンで勝った理由を学者が統計学で説明していた。日常の疑問について実験するが場所はスタジオでなく廊下、玄関、屋上などだ。メインの進行役が伊吹吾郎。かつての「水戸黄門」の格さんだ。

**C** 科学番組の「サイエンスゼロ」も面白い。Eテレは講座は堅苦しいが、講座でない番組は楽しくてわかりやすく面白い。

**D** 「あなたが主役50ボイス」は特定の場所50人に聞くアンケート番組。かつてのTBS萩元晴彦の「あなたは」に似ている。

**A** 既に表彰したから言わずもがだが「バリバラ」は好調だ。障害者の声の不自由そうなナレーションがなんとも味がある。

**B** NHKが災害復興の雨に作った歌「花は咲く」は長いもの短いものいろんなバージョンで放送されている。そのスペシャルのゲストが盲目のピアニスト辻井伸之だったが素晴らしかった。

**C** 作詞はフジで仙台出身の岩井俊二氏。最後に歌わない鈴木京香が出てこれが妙にいい。

**D** 「SONGSSPECIAL」は桑田佳祐の夏のコンサート「ガッテン」の志の輔、山瀬まみ、小野文恵。

**A** 民放のエンタメ関係者はEテレは必見だという。ヒントが山ほどあるから。

**B** 「ほ×たて」はあの時間枠で1本じゃなくて2本、3本の勝負ができるのではないか。CMが多いし、もったいぶって勝負がなかなか始まらない。

**C** 「キッチンが走る」もよく見られている。あれは料理番組ではなくかつての「明るい農村」の現代版だ。漁村、農村など食材を

提供する現場に行つて有名なシェフが腕をふるう。食べた食材の生産者たちの顔がなんともいえない。

**D** 地産地消だ。あれはしかけがなかなかいい。

**A** 毎回同じ大きなテーブルが出るがあれは運ぶのどうだろうか？

**B** 別の車に積んで運ぶそう。ほとんど屋外でやるのだから。

**C** 「サラめし」をなんとなくみてしまう。中井貴一がサラリーマンの昼飯を追っている。テレビマンユニオンの制作。

**D** 忘れないうちに言っておくがTBSラジオ「大澤悠里のゆうゆうワイド」が今日で7001回目。7000回を越えたのは評価していい。

**A** 秋山ちえ子の1万回があるが、あれはまとめて収録で生ではないから…

**B** 「梅ちゃん先生」はよかったのかなあ。あの時代を知っている者には「これ違ふよ」と言いたいのだが、そんな見方をしちゃいけないのだね

**C** そのあと遊川氏のぶつ壊しのドラマだからNHKはこれからどうするのだろう。手の内の出し過ぎドラマ。

**D** テレ東の正月の10時間ドラマ、「白虎隊」というタイトルだがあれは北大路欣也演ずる西郷頼母のドラマだ。西郷家はお出入り禁止になるが、家に女が10人くらいいてそれが娘子軍に入り、全員自決する。残った頼母のその後にふれて欲しかった。

**A** テレビ60周年記念番組は単なる回顧だけで終わった。昔の映像を使ったが「前に見た」デジャビュ感があつて興味はわかない。

**B** NHKBSで天野祐吉がやったのは一般に分かりやすくよかつた。

**C** ざっと駆け足で各ジャンルの番組を総点検したが、特オチがないかどうか不安だ。会員の皆さんの独自の指摘、ご推薦は、配布した投票用紙に期待しております。

**D** ドキュメンタリーはNHK、ドラマはSPドラマで名の知られた人などと通説の安全パイ的な見方にとられず（いや、

とられてもいいですが）よろしくご吟味ください。

【座談会出席者】  
伊藤雅浩、隈部紀生、河野尚行、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、前川英樹、松尾羊一、（書面参加）渡辺紘史

【開催日時】  
2013年3月1日（金）午後2時～5時半  
【開催場所】  
千代田放送会館・3階会議室

## 会員消息

八木康夫さんが第63回芸術選奨（放送部門）を受賞しました。

受賞対象のドラマ「悪女について」の原作は高度成長期の影で蠢く虚飾の女の破局を描いた長編（有吉佐和子）だったが、八木康夫が池端俊作、鶴橋康夫と組んで描いた世界は「富小路公子」にシンボライズされたバブル期前後の海図なき時代だった。真紅のドレスをまとい、彼女は美しい夕空に高く高く翔んだ。彼女をめぐる3人の男に刻印した悪女の中にひそむ聖性をひたむきに彫琢し、映画「パッチギ」以後の沢尻エリカという未完の女優の魅力と本質を模索したドラマだったといえる。

八木康夫は例えば、「うちの子にかぎって」「パパはニュースキャスター」「カミさんの悪口」「協奏曲」などを企画し、軽妙な物語を多産する一方で、ビートたけしを発掘し、池端俊作と組んで「昭和四十六年

大久保清の犯罪（83年）、「忠臣蔵」（90年）「イエスの方舟」（93年）といった問題作を連打した。その後も「烏鯉」（98年）芸術祭優秀賞、「百年の物語」（大正編、戦後編、現代編3部作）脚本 遊川和彦（00年）で近代女性史のドラマ化、その後は戦争と対峙する作品群を終戦記念特番として毎年企画。戦時にタイムスリップする若者が主題の「僕たちの戦争」（06年）、緑山に街中のセットを組み原爆の犠牲になつた3姉妹の悲劇を描いた「広島」（06年）や沖縄戦にさ迷う家族の「さとうきび畑の唄」（03年）、「帰国」（10年）などをプロデュース、受賞作品も多い。

「ドラマのTBS」と呼ばれた個性的演出家の時代が去り、後継世代は独特なプロデュース感覚で「昭和」という時代にパズルゲームの謎解きのように取り組んだ。それが八木康夫だ。

（敬称略 松尾羊一・記）

寺山修司が去って30年

武本宏一

あれから30年、か。

寺山修司が肝臓ガンで、人生の幕を自ら下したのが1983年(昭58)の5月4日。ロッキード事件の裁判が始まったり、大韓航空機事件が起きたりした年だ。

この年の競馬の、さつき賞・ダービーと共に制したのは、のちに三冠馬となるミスターシービーだった。

競馬好きだった寺山は、元気な頃、主宰する劇団天井桟敷の事務所を、渋谷の場外馬券売場のすぐ目と鼻の先に構えていた。たまに私が通りかかると、「武本さん、今日は何をかうの？」

出会い頭に、あのはにかんだような笑顔が私に声をかけてくれたものだ。

無性に寺山修司に会いたくなかった。

ふと我家の本棚を見上げると、片すみに「ラジオドラマ・音と沈黙の幻想」という、金箔で打たれた文字が目に入った。

取り出してみると、ずっしりと重い。黒い箱に入ったLPレコード・セットである。思い出した。その中味は、黄金期の傑作ラジオドラマが9本も収録されている、大変なお宝レコードだ。

そうだ。寺山はこの中にいた筈だ。あらためて中味を調べると、立派な解説書と、9枚のLPに9本のラジオドラマが詰め込まれている。そのラインナップが凄い。

「激流」(真船豊作。昭40・NHKFM)  
「東の国にて」(木下順二作。昭29・NH

K)、「棒になった男」(安部公房作。昭32・文化放送)、「ツキアイきれない」(井上ひさし作。昭39・NHK)などの9本だ。

その9本目に、寺山はいた。昭和43年11月27日に、青森放送で放送された「狼少年」である。さっそくレコードプレーヤーの埃を払って、針を落としてみた。

ラジオドラマ「狼少年」。

それは、荒野を吹き抜ける風の音と、その風の中から紡ぎだされるような津軽三味線の音で始まる60分だ。

ストーリーは、狼の群れにさらわれ育てられた少年が、長じて人間の少女に恋をし、ついには育ててくれた母狼を殺してしま

う、というのだが、ともかく全体の音響効果が素晴らしい。

先ずは、叩きつけるような津軽三味線、知る人ぞ知る名手の木田林松栄。音楽は、津軽をテーマに数々の楽曲を作曲して、のちに日本音楽コンクール第1位に輝いた田中利光。そして音響監修は、のちに音響の神様ともいわれた、若林駿介。メインナレーターは奈良岡朋子らの声と音楽、音響が互いに切り結んで姿を現した奇蹟のワンダーランドに、私は呆然と我を忘れて

いる。ラジオは、こんな極上の芸術作品を生み出していったのだ。たった30年前までは。

冒険者たちの挑戦 田中秋夫  
冒険家でプロスキーヤーの三浦雄一郎さんが今年5月、80歳にして3度目のエ

ベレスト登頂に挑むという。この情報に接して、三浦さんに出演していただいた往年の「ゆく年くる年」を思い出した。当時、民放AMラジオの「ゆく年くる年」は全国48社が統一番組を放送し、制作は在京局T・Q・Lの輪番制だった。モントリオール五輪が開かれた1976年は文化放送が担当の年で、局内で特番チームが編成され、私も担当になった。当時の若者たちは夢や情熱を持ってない「シラケ世代」と呼ばれていた。企画段階で議論の末、「シラケ世代だからこそ夢のある企画が必要だ。冒険と

ロマンのメッセージュを届けよう」という結論になり、タイトルも「若者たち・再びロマンの海へ」に決まった。司会には局内から若者世代に人気絶頂のものもんだアナを、アシスタントには当時上智の学生だった三雲孝江さんを起用した。ゲストには冒険家としての実績を積み上げつつあった二人に出演を依頼した。一人は富士山やエベレストからの直滑降に挑み続ける冒険

スキーヤーの三浦雄一郎さん(当時44歳)。そして、もう一人は世界初の五大陸最高峰登頂の記録保持者で、その年の五月に北極圏大ぞり横断に成功した植村直己さん(当時35歳)だった。本番当日、お二人にお会いした印象は「超人」のイメージとは違い、小柄で、謙虚な人柄だった。

番組内で植村さんは北極圏の強烈な吹雪の中を1万2千キロの横断に成功した理由について話が及ぶと「気が狂いそうな単調さに耐え抜き、弱音を吐きたがる自分打ち勝つ以外にない。進むこと、ひたすら前へ進むこと」と語った。一方、三浦さんは幼少期に病弱で幼稚園を中退したこと

や健康問題が理由で中学受験に挫折したこと、それでもあきらめずにスキーを始め、徐々に上達していったこと等を語り「小さな挫折や失敗を気にせず、『今日こ

れだけやれた』という達成感を積み上げていく。無理しない範囲で、出来ることを積み上げていけば、やがて無理がきくようになり

ます。」と語った。あれから36年が経った。植村さんは1978年に人類史上初の北極圏単独行に成功し、さらに1984年2月12日マッキンリーの世界初の厳冬期単独登頂を果たした。その日が43歳の誕生日だった。しかし、そのまま消息不明となり、懸命の捜索にもかかわらず発見されることはなかった。一方、三浦さんは1985年、53歳で世界七大陸最高峰のスキー滑降を成し遂げた。そしてこのあと、次の目標を見失っていた時期があったという。その結果、体重が増え、高血圧に糖尿病の兆候まで出てきた。そこから「人生このまま黄昏ちやいけない」と一年発起し、再度のエベレスト登頂を目指し始めたという。その為に外出時には常に両足に重りを付け、20キロのリュックを背負うトレーニングを再開した。そして、2003年、世界最高齢の70歳での登頂に成功、さらに2008年には不整脈の持病を乗り越えて75歳でエベレスト登頂に成功している。そして今年5月に3度目の挑戦をするという。「エベレストの頂上は、歩いて行くことが出来る宇宙。80歳での登頂は、出来るかどうか分からないけれどやってみる。限界への挑戦です。」と語った。

限りなくロマンを追い続けるその姿に多くの高齢者が励まされるに違いない。

11



代さんは善さんを宝として持っている。死んだ人とのつながりは宝です。

渡辺 あのカットバックの編集は素晴らしい。あれで宝の意味がわかる。脚本の渡辺さんの言葉をいくつか紹介します。

「この物語りでやろうとしたのは『溶かす』ということです。大人になるにつれ、

心の中に幾重にも薄い殻が重なり合って、本当の自分の心の中がわからなくなる。物語りなら、ふだんなら手の届かない、殻の奥にある柔らかいところを温めて溶かしてあげられる。それがじゅわつとからの外に出てくると、心がふるえて解放されて、涙が出たり、ということが起こる」

「上手な整体師はツボから少しずれたところを押すそうです。すると患者の方が体を動かして整体師の指をツボに持つてゆく。作品で自分の考えを視聴者に届ける時も、みる人が取りにきてくださるようなものが、生きる力になる作品だと思っ」

最後に  
尾野 こんないいドラマに出られて本当にうれしい。人生のステップアップになつた作品で、私の宝です。置いておく宝でなく、育てて行きたい宝です。みなさん「カーネーション」をいつまでも忘れないでください。

会場は「カーネーション」と糸子が好きでたまらないひとばかりで、終始暖かい拍手が絶えなかった。

### 第37回放送人句会

◇平成25年3月13日(水) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、大山勝美、荻野慶人、鶴橋康夫、豊田まつり、中島文博、新村もとを、橋本きよし、林備後、堀川とんこう、森治美、西川阿舟◇不在投句：尾崎麻衣子、山泉ぼん太(12人)

◇兼題：木の芽時、白子干、蛙、楽屋

お母さんホカホカごはん白子干し 康夫

楽屋寝の巡業つづく春炬燵 ぼん太

蛙てふあだ名の師あり優しかり 丈博

春怨の紅濃く差せる楽屋妻 ぼん太

古寺無住天地蛙の目借時 ぼん太

三河湾海色変り白子干 視郎

春めきて楽屋のれんの草色に 視郎

木の芽どき障子わづかに湿りたり 視郎

抱き寄せて蛙の声を遠ざける とんこう

この里のここに在るべし木の芽どき とんこう

しらす干し一尾一尾の目玉かな 丈博

相部屋の楽屋うらめし花衣 治美

蛙食ふフランス女鼻赤き 丈博

白子干す傍らに猫寝てをりぬ 阿舟

凝らす目も遊ぶ目になり蛙の子 康夫

たたみいわし炙り愚かな祖父のこと まつり

ちりめんのかさかさとなるいのちかな まつり

放射能われらが世紀木の芽どき 備後

しらす干し醬油一差し飯の友 麻衣子

とんこう

道折れて蛙の群れの声変る とんこう

化粧する楽屋にひびく春の雷 視郎

ふるさとの近づく気配木の芽晴れ 康夫

新しき恋芽生ゆるも木の芽時 阿舟

信貴山の回廊よぎる赤蛙 もとを

目を閉ちて仕事終へたり夕蛙 麻衣子

春深く虚実が混じる楽屋花 とんこう

狂乱の蛙の恋に立ち会へり 阿舟

春冷えの楽屋意外な配役表 きよし

木の芽どきほらあの人があの人と 視郎

武蔵野に通る魔の影木の芽時 慶人

剥き出しの木の芽キュウツと処女の顔 康夫

報はるる事もありたり昼蛙 備後

神々の御坐す岬や木の芽どき きよし

春楽屋藍手拭の頬被り きよし

海からの風やはらかに木の芽どき きよし

気の重き楽屋見舞や春火鉢 まつり

相部屋の楽屋のれんをゆらす宵 治美

木の芽らの息新しき補聴器に まつり

風止みて声通り来る遠蛙 備後

津軽路は闇濃く蛙鳴くばかり ぼん太

愛らしき家出少女や木の芽どき 丈博

木々芽吹くこの先地図に道は無く 丈博

遠蛙わろき噂のしのび寄る ぼん太

遅参して蛙の畦にゆき昏れぬ 丈博

春に倦んで楽屋話のはて知らず まつり

内海の小さき浜の白子干 丈博

山動き楽屋雀の巣が揺らぐ 備後

木の芽時街なき町をあてもなく 慶人

白子干し鯛や平目の稚魚まじり 視郎

木の芽晴れ病の妻も艶めきて 康夫

白子干し量るに箆を用ひけり もとを

### 次回放送人句会

◇5月8日(水) 19:00 投句締切

◇於：赤坂・麦屋 (FAX:03-3586-0056)

◇兼題：杜鵑(ほととぎす)、蚕豆(そら)

まめ)、雛粟(ひなげし)、撮り直し

◇特別選者 星野高士氏

### 第15回放送人の世界

石橋冠く人と作品

日時：3月29日(金)、30日(土)

午前11時～午後5時

会場：NHK放送博物館

講師：聞き手 石橋冠、今野勉

### 【上映番組】

29日

「昨日、悲別で」 脚本・倉本聡

出演：雨宮良、五月みどり

「新宿鮫・無間人形」 脚本・今野勉

出演：館ひろし、久松史奈

「玩具の神様」 脚本・倉本聡

出演：館ひろし、永作博美

30日

「菊次郎とさき」 原作・ビートたけし

脚本・松原敏春

出演：陣内孝則、室井滋

「刑事一代 平塚八兵衛の昭和事件史」

脚本・倉本聡

出演：渡辺謙、柴田恭平

私の手元に、B5用紙7枚の黄ばんだコピーがある。藤沢周平さんが書かれた「清左衛門残日録」ドラマ化へのアドバイスの手紙である。92（平成4）年10月22日の日付で、宛先は演出の村上となつているが、スタッフ全員にあてたものだった。

小説を読んだだけでは、三屋家の家督を継いだ文四郎のイメージが掴めなかったので、どんな人物像で、どんな父子関係かを藤沢さんに電話で訊ねた。その二日後、電話の説明では不親切だった、もうちょっとくわしく説明したいと、手紙が届いたのである。私の電話の受け答えに、不安を覚えたからに違いない。

手紙には、武家の次、三男とは異なる、長男のへひと風格が説かれていた。それは、時代劇を作る上で、常識として知っていなければいけないことだった。

時代劇鑑賞の一助になればと、少し長いが引用する。三屋又四郎の人物像は――

『①長男的性格の持ち主

（略）武家の長男は（略）、家の後継ぎとして親戚とのつき合いから着る物、喰べ物にいたるまで、次、三男とはまったく違う扱い、優遇をうけて育ちます。

それで、家を継ぐころには、後継者としての責任感とプライドが出来上がって、若くとも一種の貴族が身につくようになる（略）。』

具体的に言えば――、

『④言語、動作に軽々しいところがない

⑤礼儀、作法に手落ちがない

①親、兄弟に関しては責任を持つ家父長的な態度が目立つ』

『②考え方、進退の基準は、家の保持にある。』

又四郎の日々の目的は、過失なく三屋家を保持して、いつの日か無傷で家を後継ぎに譲ることにあります。そのことに懸命であることが親に対する何よりの孝行であり、ことさらに隠居の父親を慰めたり、機嫌をとったりすることは必要のないことです。

下城の挨拶のときに、二、三世間話をしたり、城中のことを話したりすることはあるでしょうが、こまかなことは妻女まかせでいいわけで、ここに嫁の里江が活躍する余地が生まれます。』

続けて③として、『又四郎は謹直な人間ですが、コチコチの堅物ではなく、温厚ですが、いざというときはきつぱりと決断できる人間と考えたい。』

さらに、嫁の里江のキャラクターと、武家の女性像の記述がある。里江は『小説では少々出しやばりと思われるほど、あれこれと清左衛門に口出ししますが、武家の嫁としては、同じような口出しをしても態度はもうちょっと控え目である方がいいように思います。封建時代の武家の嫁の立場というものは、弱いものと思われていますから。』

私自身としては、封建時代でも、市井の女はもちろん、武家の女性もけっこう強かったと認識しているのですが。』

最後に、『映像となるとまた別のものになりましうから、私の考え方に拘泥する必要は全然ありません。』参考意見として

聞いて貰いたいと、あった。

これは、その後の藤沢時代劇を作る時だけでなく、他の時代劇を作る折にも、読み返していたものであるが、久々に読んで気づいた言葉がある。「ひと風格がある」……こう言う言葉と言ひ回しを、私はいつから無くしてしまったのだろうか、ふと悲しく、悔しくもなる。

「風格、その人の風采と品格。ひとがら。人品。」と辞書にある。それにしても、我が身は風格とはほど遠い……。

気づいたことがもう一つ。藤沢さんが実にご上手である、ということだ。決して高みから物を言うのではなく、相手の立場に立って噛んで含めるように語る。山形師範学校を卒業して、中学校の教師となつた藤沢さんを彷彿とさせる。

毎年、鶴岡市では、藤沢さんの命日近くに「寒梅忌」という催しがある。今年は1月20日に、藤沢さんの追悼式と記念講演会などが開かれた。「寒梅忌」を主催する人たちの中に、湯田川中学の教諭・藤沢先生を慕う教え子たちがいる。49（昭和24）年から、わずか二年ほどの師弟関係であるにも関わらず、彼らは今も、藤沢先生に大きな影響を受けたと誇らしげに語る。

今年に行けなかったが、来年こそは、湯野浜温泉に泊まりがてら、「寒梅忌」に行こうと思っている。何より、一、二月は、寒だらが丸ごと入った名物の「どんがら汁」が美味しいのだ。

手紙の話に戻る。藤沢さんは他に、二枚の自筆の建物見取図を添えてくれた。

①として「庄内藩200石の藩士の実際の住居見取図（86坪、屋敷40坪、500坪）」

②として「執筆中、頭にあった三屋家の見取図」とある。①は庄内藩史にも載っている図面をわざわざ書き写したものである。②を見ると、清左衛門が殿様より拝領した新築の隠居部屋が、三屋家の何処に建てられたかが分かる。

スタッフには②の図面だけで事足りるのだが、実際の住まいも知っておくようにと、①の図面を加えるところが、いかにも藤沢さんらしいのである。

さて、実際のセットでは、美術の田嶋宣助が、母家と隠居部屋の間を渡り廊下を配した。スタジオのスペースに限りがあるので、渡り廊下は母家との間を斜めに繋がつている。見た目は「おや？」と思うのだが、映像の嘘で、お客さんには斜めの配置は気にならない。

約3か月あまり、その隠居部屋で、仲代清左衛門は収録に臨むことになる。嫁の里江、南果歩の気配りが描かれる。制作費をかけぬようと、私は三屋家のメインセットを建てる時は、俳優は3回分の台本を持つてまとめて収録しようとしていた。ところが、仲代達矢さんに来れないとあっさり断られる。いいホン（脚本）だから、大事に丁寧に表現したい、芝居がしたい、どうかまとめ録りは、ご勘弁願いたい、と。

お説ごもつとも、まとめ録りを諦める。後に分かるのだが、仲代さんは決して台詞覚えが早い方では無い。普段、移動に使うワンボックスカーの中に、自ら模造紙に台詞を書き写して、車の天井や窓に貼って、移動中も台詞を覚えていた。

役者の生理、心情を付度して収録を考えると、仲代さんに教わったプロデューサーの

心得である。

もうひとつ、仲代さんに改めて気づかされたことがある。お愛想が苦手だという、プロデューサーには最悪の弱点を持つていることを教えられる。ある日スタジオに顔を出すと、仲代さんが「菅野ちゃん、ホンがうまく行っていないと直ぐ顔に出るから、無理してスタジオに顔を出さなくて良い」と言う。これを翻訳すれば、「不機嫌な顔で馴れないお愛想を言い、現場に来なくて良い、あなたはひたすら脚本作りに勤しむべし」との激励であった。

演じ甲斐のある脚本を役者に渡してあげられれば、役者もスタッフも夢中になっ

### 第10回人気番組メモリー

「日曜美術館」

日時・3月20日（水・祝）午後1時半～  
会場・情文ホール（横浜情報文化センター）  
6階

ゲスト・太田治子（作家・初代キャスター）

千住 明（作曲家・現キャスター）

西松典宏（演出）

小河原正己（制作・放送人の会）

司会・加賀美幸子（アナウンサー・放送

人の会）

昭和51年から37年間に及ぶ長寿番組のメモリーは膨大である。今回はその中から登場者に忘れられない番組、出演者、作品をしぼって語っていただく構成。

初代キャスター太田治子さんが登場する第1回「碌山・荻原守衛」では、碌山と相馬黒光の有名な不倫について、ゲストの

て、素敵な作品に仕上げてくれる、そう確信したのがこの作品であった。

第1回目で清左衛門が金井奥之助（佐藤慶）を誘って磯釣りに行く。竿は「庄内竿」と言い、長い竹で出来た延べ竿（一本竿）である。顔合わせ本読みの日、稽古場には夢中になった「小道具さん」が飛行機の手荷物で、通路にそつと寝かせて運んできた庄内竿が用意されていた。今では絶対、機内持ち込みは不可能だが、当時はまだ規制が緩かったのだろうか、或いは小道具さんが何らかの奥の手を使ったのだろうか。いつか会うことがあったら、その秘密を聞いてみたい。（つづく）

白井吉見氏の見解にするべく切り込む太田さん。毒舌和尚・今東光の回では兵児帯も絵具も買えない画家関根正二の貧乏暮らしを語った今和尚が「関根は20歳で天寿を全うした。俺の物は残らねえがあいつのものは残るよ」と言って涙した。



太田治子さん

千住明さんは平成23年からのキャスターで、3・11以後の東北への出張が多い。津波に襲われた石巻文化センターにある高橋英吉の木彫の代表作「潮音」を語り、目は開いてはいるがむしろ閉じてみんなの声を聞いているようにみえる、と言う。



千住明さん

千住さんが選んだ番組は「音なき世界」再生の春」で、作家佐伯一妻が愛する松本竣介の絵「白い建物」をみる。絵は水道橋の駅を描いた小さなもので、他人も電車もなく静寂にみちている。



小河原正己さん

小河原さんは自分が制作した田中一村の番組を選ぶ。一村は川端竜子と意見を異にして日本画壇を離れ、奄美大島に住んでアダンやクワズイモなど亜熱帯植物を描いた。対象を見つめつくすと、写実を超えて幻想的、現実離れた世界が生まれる。長年埋もれていた画家だが、放送されると凄く反響だった。

西松さんは昭和54年から平成19年まで、「日曜美術館」の制作担当。オルセー美術館が新しくできたのを皮切りにフィレンツェ、プラド、ルーブルなどを手掛けた。ルーブルはさすがに大きすぎて日仏合作になったが、会場で上映された番組ではデ

ボラ・カー、レイモンド・ジェロームが登場した



西松典宏さん

それぞれが選んだ1枚の絵は、太田さんは浅井忠の「グレーの洗濯場」ブリジストン美術館蔵。この絵を表紙に使った太田さんの著書「夢さめてみれば 日本近代洋画の父」（朝日新聞出版）が紹介され、冒頭の文章を加賀美さんが朗読した。千住さんが選んだのは高山辰雄の「夜の風景」。生命のまわりにあるもやもやを描こうとしている、と千住さんは言う。小河原さんはジョルジュ・ド・ラトゥールの「大工のヨゼフ」を選んだ。イエスが持つ蝋燭の光で十字架を作るヨゼフの絵で、謎に満ちている。加賀美さんが選んだのは夏目漱石が描いた絵で「猫」。西松さんが選んだのはダビンチの「モナ・リザ」だった。

加賀美さんは総合司会で、朗読もし、番組についても語り大忙しだったが、観客は加賀美さんの声が聞けて満足していた。



加賀美幸子さん

会員名簿

2013.3.22 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石高健次 石橋冠  
磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 今井義典 岩澤敏 【う】上村忠 碓井広義 臼杵敬子  
歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 太田昌宏 大西康司 太田亮  
大西文一郎 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暎 荻野慶人  
小田久栄門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤迪 加藤義人 金沢敏子  
金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】岸田功  
北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 【こ】小池勝次郎  
河野尚行 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正  
坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 志津木敬 嶋田親一  
清水満 下崎寛 下重暎子 白井博 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木嘉一 鈴木昭典 鈴木典之 鈴木道明 須磨章  
【せ】せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広  
田原英二 田原茂行 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暎子 戸田佳太 外崎宏司 豊田由紀子  
豊原隆太郎 【な】中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治  
中村敏夫 中村美美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之  
【の】信井文夫 【は】橋本深 林健嗣 林裕史 原由美子 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤久ミネ 【ほ】星田良子  
堀川とんこう 【ま】前川英樹 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一  
三原治 三村景一 三村千鶴 宮川鏡一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】諸橋毅一  
【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治  
吉澤保 吉永春子 吉村直樹 【わ】渡辺紘史

新会員紹介

太田昌宏(元NHK)

NHK報道局経済部を経て放送文化研究所で放送史、主に中東メディア事情の研究。  
「メディアアの現場ではなかなか言えない、発表しにくい事をOBのわれわれが代弁しよう、と考えています」

並木章(元TBS)

制作部、社会情報部など制作現場を経てテレビ編成局長、TBSビジョン社長。スタジオ番組「圭三シヨ」を経てドラマデビュー作は新聞記者を扱った「泣くなマックス」(62年) (今野勉「テレビの青春」に詳しい。217P)。東芝日曜劇場「カルテロ・カルロス日本へ飛ぶ」プロデュース。芸術奨励賞。

四宮康雄(元NHK)

報道局報道制作、報道(社会)部。おもな作品。「風の王国」(ギャラクシー賞、高柳賞など)、SPドラマ「ひかりのまち」(企画・構成・演出)、SPドラマ「歓喜の歌」プロデュース、SPドラマ「ミエルヒ」企画担当(ギャラクシー賞、芸術祭など)。

太田亮(フジテレビ)

「東京ラブストーリー」「101回目のプロポーズ」「ひとつ屋根の下」などホームドラマ風な予定調和を排した、いわゆる

トレンディドラマを大ヒットさせ、フジテレビの「月9」路線を確立。演出家や脚本家に傾斜しがちなドラマの時代を、多様なプロデューサーの時代に移行させ、拓いた。  
(右記・4月から入会の方を含む)

編集後記

▼遅くなりましたが、放送人グランプリのノミネートのための恒例・下馬評座談会をお届けします。座談会をもとに編集部が編集・構成したもので、発言そのままを記録したものでなく、またA、B、C、Dとあるのは単なる文章の区切りで、特定の発言者を示すものではありません。多くの方はこのスタイルになれていただいたと思います。さすが念のため▼前回、武本宏一さんと話の行き違いがあつて、連載が終わると書きましたが、ご覧のように続けていただいています。武本さん、失礼しました。ごめんなさい▼松尾羊一さんは腎臓の手術の予定でしたが、いろいろ考えて見送りになりました。現在顔色もよく、元気です。まわりはそのうちお酒も飲めるだろうと期待しています▼東京のサクラは早い開花のタイ記録だそうで、事務局周辺のサクラも見ごろです。四谷駅そばの土手、少し足を延ばせば九段、千鳥ヶ淵公園とサクラの名所がたくさんあります。近くへいらつしやったら事務局へもお寄りください▼3月15日に佐藤真美子さんが赤ちゃんを連れてて書記局にきました。赤ちゃんを預けるだけでもついで5月連休明けから事務局に出勤の予定です。  
(視郎)